

## 第2章

# 認知言語学の文法観は どこが独自ののだろうか？

野村益寛

### 1. はじめに

ことばを学ぶには辞書と文法書が必要だと言われる。辞書で単語を覚え、それを文法書で説明されている諸々の規則に従って活用させたり、組み合わせたりすればよいというわけである。これは、英語をはじめとする私たちの外国語学習の経験に照らしても、もっともなことのように思われる。では、そもそも単語に加えて、文法というものがなぜ必要なのだろうか？

幼い姉と弟がクレヨンで一緒にお絵描きをしている。弟が姉に向かって「青いクレヨン、おわったらかして！」と言ったとしよう。なんということもないことば使いだが、「青いクレヨン」という表現が「青い」という形容詞と「クレヨン」という名詞から成り立っていることに注目しよう。このように形容詞と名詞を組み合わせることなく、＜青いクレヨン＞という意味を一語で表すことは可能だろうか？もちろん、可能である。仮にそれを「ネキキ」ということにしよう。さて、同じことをく赤いクレヨン＞、＜黄色いクレヨン＞・・・についても行い、それぞれ「クハニ」、「ウノサ」、・・・と名づけるとする。そうするとどうなるだろうか？クレヨンの色の数だけ、新しい語が必要となる。同じことを色鉛筆や色紙についてもおこなうとすると・・・。

このように、私たちが表現したいと思う物や事柄の数には限りがない。一方、私たちの記憶の容量には限界があり、無限はもちろんのこと、何兆、何億、あるいは何千万といった数の単語でさえ記憶するのは難しい。また、私

たちが発音したり、聞き分けたりすることができる音の数も限られているので、適度な長さの単語を何千万、何億、何兆も作ることはまず不可能である。このように考えてくると、上でみたような形容詞と名詞を組み合わせるといった方法がこうした問題を回避するための優れた仕組みとなっていることがわかるだろう。こうした仕組みこそが「文法」にほかならない。すなわち、文法とは、形態素（例：青＋さ）を組み合わせさせて語を作ったり、語を品詞というカテゴリにまとめあげた上で、組み合わせさせて句（例：青い＋クレヨン）や文（例：姉が弟に青いクレヨンを買った）を作ったりするというように、意味をもつ小さな単位を組み合わせさせて大きな単位を作り出す仕組みのことをいう。この文法という仕組みを持つことによって、私たちは、「敵が来たぞ」とか「向こうに食べ物がある」のような眼前の出来事に関する決まった類いのメッセージしか発することができない動物とは違って、森羅万象について語ることが可能となる。そのため、いかなる言語理論にとっても文法というものをどう考え、どう説明するかが重要な課題となるわけである。

本章は、認知言語学が文法をどのように考えるのか、それは従来の文法の考え方とどこが共通し、どこが異なるのかを考えることを目的とする。認知言語学の文法研究は必ずしも一枚岩ではないが、ここではR.W. ラネカーが提唱する「認知文法」(Langacker 1987/1991, 2008)の考え方を中心にみていくことにしたい。次の2節では認知言語学の文法観を特徴づける2つの考え方——使用基盤モデルと記号的文法観——を紹介し、前者から後者が帰結することをみていく。この文法観は一見きわめて穏当で、常識的に思われるはずである。そこで、3節では、2節で概観した認知言語学の文法観のどこが新しく、どこが新しくないかを言語学史に照らして検討することにする。4節は結論である。

## 2. 認知言語学の文法観

本節では、認知言語学の文法観を特徴づける考え方を「使用基盤モデル」と「記号的文法観」の2つに集約し、それぞれについて説明するとともに、両者の関係について考える。

## 2.1 使用基盤モデル

言語に関する知識にはさまざまなものがある。わかりやすい例では、語の発音と意味に関する知識がそうである。例えば、<ろうをまぜてかためた、棒の形の画材> (『三省堂国語辞典』) のことを「クレヨン」というとの情報は日本語の言語知識の一部である。また、形容詞と名詞をつなげるとき、日本語では形容詞の方が先にくるというのも私たちの言語知識に含まれる。一方、言語知識の中には、その存在が話者にあまり意識されていないものもある。例えば、「けっぱ」と「けっぱ」はともに存在しない単語だが、どちらの方が日本語の単語らしく響くかと問われれば、前者と答えるであろう。このことは日本語話者が「促音(っ)の後には有声子音はくることができない」という知識をもっていることを示している。

さて、こうした言語知識——とりわけ本章の主題である文法に関する知識——はどのようにして得られるのだろうか？ ひとつの考え方として、生成文法(第9章)では、私たちは文法知識のおおまかな設計図のようなものをもって生まれてきて、生まれ落ちた先の社会において話されている言語に合わせて、その設計図の未定部分を決定していくとする考え方をとる。例えば、自分の母語が、動詞が目的語の後にくる(日本語のような)言語になるか、前にくる(英語のような)言語になるかは、生まれてみないとわからない。しかし、ひとたび自分の母語がどちらのタイプの言語なのかがわかれば、設計図には、「前者だったら後置詞(例：学校で)を使い、助動詞は動詞の後にくる(例：食べるだろう)、後者だったら前置詞(例：at school)を使い、助動詞は動詞の前にくる(例：will eat)」などとあらかじめ書き込まれているので、それに従って文法を作り上げていけばよいことになる。

これに対して、こうした設計図のような生得的な言語知識を可能な限り仮定しないことを前提とする認知言語学(第9章)では、きわめて常識的であるが、言語知識は他者との言語使用の場から立ち上がると考える。この文法観のことを「使用基盤モデル」(the usage-based model) という(Langacker 1999: Ch.4)。使用基盤モデルを特徴づけるキーワードとして①ボトム・アップ、②最大主義、③非還元主義の3つが挙げられる。これらを順に概観していこう。

## ①ボトム・アップ

「ボトム・アップ」とは、個々の具体事例から出発し、一般規則を導き出そうとする帰納的なアプローチのことをいう。私たちが「偶数」という概念を学習したときのことを思い返してみよう。最初は、2、4、6、8、10のような具体的な数字を偶数として学んだことだろう。それから、下1桁が○2、○4、○6、○8、○0の数が偶数だと判断することができるようになる。そして最終的にはすべての偶数は $2n$ という一般形で表せると理解できるようになる。こうして私たちは「偶数」をボトム・アップ式に身につけたわけである。

言語に関して「ボトム・アップ」とは、言語知識は、言語使用の場で交わされる実際の発話から、繰り返し現れる共通の型（スキーマ）を抽象化、カテゴリー化、定着化のプロセスによって紡ぎ上げることによって得られるとする考えを指す。例えば、ある日、母親が幼いわが子と遊んでいるとき、二人の目の前にある人形を見て、Give me the doll. と言って手をさし出したとしよう。そして、運良く子どもが母親の意図を読み取り、人形を渡す。同じことが母子の間で何度か繰り返され、定着する。さて、今度はそのやりとりを脳でみていた父親が子どもに Give me the doll. と言ったとする。当然、母親とは表情も声の質や調子も身振りの大きさも異なるはずである。子どもはこれを母親の Give me the doll. と全く別なものとして見るだろうか？ そんなことはないはずである。物理的な性質が厳密に言えば異なっているとしても、それらを同じものとしてまとめ上げるカテゴリー化の能力が子どもには備わっているからである。このような物の受け渡し遊びが繰り返されるうちに、やがて子どもは何か欲しいときに、Gimme O (O= 目的語) と言えばよいことを身につける。さらに、受け手が me 以外の事例に接するにつれて、ひとかたまりとして当初覚えた Gimme が Give me だとわかるようになると、共通性を取り出し、Give OO という型を抽出し、Give doggie paper. のような言い方もできるようになる。さらに、Mommy give them milk and sugar. のように命令文以外にこの型を用いたり、動詞の時制を変えたりして、I gave big tiger a bracelet. のような言い方もできるようになると、S give OO という型が出来上がる。これと、同様にして得られた S send OO などと合わせて抽象化することによって SVOO という二重目的語構文の型

が立ち上がることになるわけである。

## ②最大主義

「最大主義」とは、文法に関する知識は慣習的単位の集まりから成り、一般性の高いものから、個別的、特異的なものまでをも含む膨大かつ余剰的なものであるとする考え方である。この最大主義の考え方は、文法は少数の一般規則から成り立っていて、それに従って語を組み合わせれば文ができるとする伝統的な考え方とは本質的に異なる。しかし、私たちの言語知識には実際に特異的な知識が含まれていると考えられる。例えば、英語の「The + 比較級、the + 比較級」構文（例：The higher you go, the colder it gets.）や Long time no see. といった表現は、5 文型のような一般規則からは導けないが、英語の母語話者の知識を構成していることに間違いはない。

特異的というわけではなく、一般規則に従ってはいるが、そこには収まらず、低いレベルでの一般化しかできそうにない事例として explain という動詞を取り上げよう。この動詞は二重目的語をとることができないとされる。例えば、学習英英辞典として有名な『ロングマン現代英英辞典』第5版には次のような注意書きがなされている。

- (1) You explain something to someone: He explained the system to me (NOT explained me the system)

ところが、explain O1 O2 の O1 が代名詞の場合は、ふつうの名詞よりも容認性が上がると判断する人もいる。鷹家・林 (2004) によれば、We explained him our behavior. と We explained John our behavior. という2つの英文を英米の約100名の母語話者に示し、アンケート調査をおこなったところ、アメリカではどちらの文も2%の話者しか容認しなかったのに対して、イギリスでは him の場合が10%、John の場合が7%の話者が容認したといい、O1 が代名詞の方が容認性が若干上がっている。しかし、どちらの文も容認度は低く、学習英英辞典が explain は二重目的語をとらないと注意を促すのもうなずける。ところが、Google で検索すると、次のような表現がけっこう見つかる。

- (2) a. Could someone please explain me what I'm doing wrong?  
 b. Can anyone explain me what is gpu clearance?  
 c. Can someone explain me who Nea is?  
 d. Can someone explain me where I'm doing it wrong?

そうすると、explain は二重目的語を決してとれないとまでは一般化できず、Can {someone/anyone/you} (please) explain me wh-S? のようなスキーマにおいてならば二重目的語をとれなくもないと言わなければならない (Taylor 2012: 31)。このことは、母語話者の文法に関する知識は、SVOO のような抽象度の高い一般規則のみから成り立っているのではなく、このような適用範囲の広くない特殊なスキーマをも含み、それに基づいて実際の言語使用がおこなわれていることを示唆する。

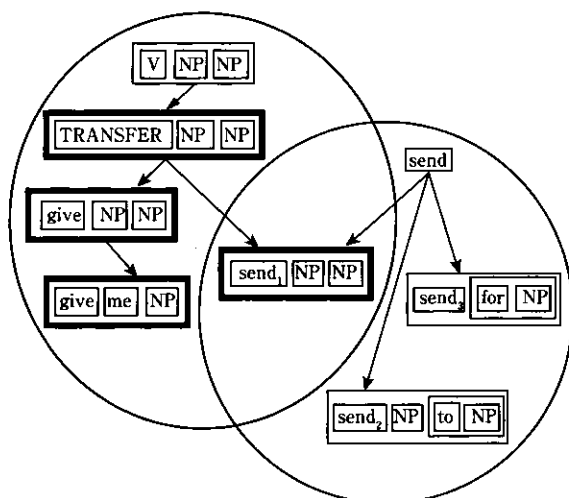
### ③非還元主義

「非還元主義」とは、一般規則から導き出すことができる具体事例であっても、定着度・慣用度が高ければ、一般規則に還元して、そこからその都度導くようなことはせず、そのままの形で話者の知識に含まれるとする立場である。さきほどの偶数の例で考えると、偶数は  $2n$  という一般規則で表わすことができるが、私たちが偶数を使うとき、この  $2n$  の  $n$  のところにいちいち整数を代入して導き出しているかという疑わしい。多くの人にとって、2、4、6、8、10 はそのままの形で偶数として記憶されているはずである。(その証拠に、これらは「にーしーろーやー (ばー) とー」のように独特の発音をされる。) また、ある数が偶数か否かを判断するときも、その数字が  $2n$  で表わされるかどうかをもとに判断するよりも、下1桁が○2、○4、○6、○8、○0 のようになっているかどうかで判断することだろう。このように、2、4、6、8、10 は、一般形  $2n$  から導き出すことはできるが、それに還元することはせずに、そのままの形で私たちの知識に含まれているとするような立場が「非還元主義」である。

この考え方に従うと、先にみた二重目的語構文は、抽象的な文法的スキーマ (例: SVOO) のみならず、形式も意味も具体的に慣用度の高い語彙的表現 (例: Give me a hug!) や、語彙的要素と文法的要素をともに含む、中間

のさまざまな抽象度・慣用度のスキーマ (例: Give me O, Give OO, S give OO, Can [someone/anyone/you] (please) explain me wh-S?) を擁するネットワークをなし、話者の言語知識を構成していることになる (下図参照)。このことは、語彙と文法は話者の言語知識において別部門を構成するのではなく、意味や形式の抽象度の違いに過ぎないということを意味する。

(3) 二重目的語構文のネットワークの一部 (Langacker 1999: 123)



私たちの言語知識が非還元主義的な特徴をもつことを示す事例をみておく。最初に文レベルの例をみてみよう。英語において聞き手の年齢を尋ねる場合、How old are you? という言い方を用いる。この表現は英語の文法規則 (Wh 疑問文の作り方) に沿った表現であるため、一般的な規則に語 (how, old, be, you) をあてはめ、その都度作られると考えられるかもしれない。しかし、そうではなく、この表現はそのままの形で言語知識に含まれているものと考えられる。次の例をみてみよう (cf. Taylor 2012: 100)。

- (4) a. What is your age?  
 b. How long ago were you born?  
 c. What age do you have?

これらの表現はいずれも英語の文法規則に従っているので、非文法的というわけではないが、相手の年齢を聞くのに用いられることはまずない。そのため、こうした文法的だが非慣用的な表現と区別するために、How old are you? という慣用表現はそのままの形で言語知識に含まれる必要がある。このことは、私たちが慣習的に用いる表現は文法的に可能なもののうちのごく一部にすぎないということを意味する。文法的に可能な表現のうちどれを慣習的に用いるかは個別に記述するしかなく、言語知識の中にはこうした個別・特異的なものが含まれることになる（例えば、(c) の What age do you have? は英語では非慣用的であるが、フランス語ではそれに対応する表現 Quel age avez-vous? が慣習的に用いられる）。

次に句のレベルの例として、total failure と total success の2つの表現について考えてみよう (Taylor 2012: 2)。これらは、How old are you? と What age do you have? の対比とは異なり、どちらも完全に容認可能なものである。しかし、英語母語話者には total failureの方が total success よりもこなれて、自然だと感じられる。この直観は、コーパス・データにおいて前者の方が後者よりも頻度が高いことから裏付けられるものである。こうした使用頻度に関する知識は、「形容詞＋名詞」というスキーマからは導き出せないで、個々の具体的事例に付随する知識として言語知識に含めておく必要がある。

最後に語レベルの例をみておこう。swayed (sway の過去形) と suede (スエード革) の発音を辞書で調べてみると、両方とも /swéid/ と表記されている。ところが、ネイティブ・スピーカーがこの2つの語を発音すると、swayed の [d]の方が suede の [d] よりも長く発音される。すなわち、語末の [d] は、それが形態素である場合の方がそうでない場合よりも長く発音されるわけである。さらにおもしろいことに、同じ過去時制を表わす形態素 -ed であっても、使用頻度の低い動詞につく -ed の方が使用頻度の高い動詞のものより長く発音されるという。例えば、mauled, hovered, kneaded, inspected の語末の [d] は、それぞれ called, covered, needed, expected のものよりも長く発音される。このことは、使用頻度の高い動詞の過去形は、「動詞原形＋-ed」としてというよりは、suede と同様、ひとかたまりとして記憶されていることを示唆する。使用頻度の低い動詞の過去形も、高い動詞



の過去形も「動詞原形+ -ed」というスキーマの事例であることにはかわりないが、後者をスキーマに還元し、そのつど動詞原形に -ed を付加して過去形を導き出しているとする、mauled と called の語末の [d] の長さの違いを説明できなくなる。そのため、called, covered などの使用頻度の高い動詞の過去形はそのままの形でネイティブ・スピーカーの言語知識を構成していると考えられる (Bybee 2007: Ch.9)。

上でみてきたように、慣用度・頻度に関する知識は、他者とのコミュニケーションにおいて実際に言語を使用することによってはじめて得られる性質のものである。話者は形と意味だけでなく、頻度も含めて言語使用の場から言語知識を織り上げていくのである。

以上、使用基盤モデルの3つの特徴をみてきた。このモデルにおいては、他者との実際の言語使用において生じる具体的事例を基盤にカテゴリー化、抽象化などの認知能力を用いて構造化した慣用的言語単位の集まったものが文法であると考えられるわけである。

ところで、文法に関する知識は、ある一定の年齢になると完成し、生涯変わることがないというわけではない。文法は話者が実際の言語使用の場において他者と交渉しながら用いるものであり、ネットワークとしての文法知識は使用のたびごとに当該部分が活性化し、定着度を増す一方、あまり使われない部分は廃れていくことになる。また、大人になってからも、新たなネットワークを発達させることもありうる。例えば、the speech was being debated. のような受身の進行形は、英国の詩人サウジーとコールリッジの文学サークルが普及させたとされるが (Brinton and Traugott 2005: 159)、英語話者の中には彼らの影響を受け、大人になってからこの用法を新たに身につけた者もいたはずである。このような意味において、文法とは完成するものではなく、常に作られつつあるものとみるべきであろう。

## 2.2 記号的文法観

前節でみたように、文法が言語使用の場において実際に生じる具体的な言語表現に繰り返し現れる共通性を抽象化・カテゴリー化することによって得られるのであれば、実際に生じる表現が具体的な語彙から構成され、意味を

表わす限り、文法も抽象的とはいえ何らかの意味を表わすと考えられる。語が意味と形が結びついた記号であるというのはソシュール以来おなじみの考え方であるが、語彙と同様に、文法も「記号」であり、意味を表すとする考え方のことを「記号的文法観」(the symbolic view of grammar)という(☞第1章)。この記号的文法観は、使用基盤モデルを採ることの帰結であり、両者は表裏一体の関係にあると言える。

ここで注意したいのは、文法が意味を表わすことと、文法が意味から予測されることとは別のことであるということである。認知言語学では、先にみたように、文法は語彙と別部門をなすものではなく、連続体をなすと考ええるが、文法が意味から完全に予測できると考える立場は採らない。これは少し考えれば明らかである。例えば、donate という動詞は、意味としては give と類似しているが、だからと言って give と同様に二重目的語をとれるわけではない(cf. \*They donated the museum money)。また、上でみた explain が Can {someone/anyone/you} (please) explain me wh-S? というスキーマでは二重目的語をとりやすいが、その他ではとりにくいことを意味の点から予測することは難しいだろう。

では、文法が意味を表わすとする記号的文法観に立った文法研究はどのように進めるかということ、次の手順に沿っておこなわれる (Langacker 1999: 43)。

- (5) (i) ある道具立てが言語表現の意味記述において必要であることを示す。
- (ii) その道具立てが独立に観察される認知能力と関係していることを確認する。
- (iii) この道具立てが文法現象を明示的に記述するのに必要であることを示す。

(5i) についていうと、認知言語学では、意味とは概念内容をどのように把握するかにあると考える(☞第3章)。例えば、「上り坂」と「下り坂」の二語は、同一の坂(=概念内容)をどこに視点をおいて描写するか(=把握)の点で異なり、それに応じて意味も異なると考えられる。すなわち、(5i)は語彙の意味を記述するのにどのような「把握」(construal; 「捉え方」)とも訳され

る)のタイプが必要かを探ることに等しい。「把握」とは私たちの心の働きの問題であり、語彙の意味を記述する上で必要な「把握」のタイプが、非言語的な現象においても観察されるような認知能力であることを要請するのが(5ii)である。これは、言語を認知能力一般と関連づけて説明しようとする認知言語学の方法論そのものである(第1章)。(5iii)は、語彙の意味を説明するために要請された道具立てが文法記述にも有効であることを示すことにより、文法が意味をもつことを示すことになる。

以下、(5)の手順を踏んだ文法研究の例として「繰り上げ構文」を取り上げることにする(Langacker 1999: Ch.11)。次のペアをみてみよう。

- (6) a. I expect that David will criticize this plan.  
 b. I expect David to criticize this plan.

expect という動詞は、(a)において「(that 節が表す)事柄を予期する」という意味を表す。一方、expect は (b) のようにも用いることができる。(a)と(b)を比べてみると、(a)において従属節動詞 criticize の主語であった David が、(b)では主節動詞 expect の目的語になっている。(そのため、この文を受身にすると、David is expected to criticize this plan.となる。)生成文法では、これを従属節の主語から主節の目的語へ繰り上がったと考えて、(b)は「繰り上げ構文」と呼ばれる。同様に、David is likely [△ to criticize this plan] や This plan is easy [for David to criticize △] も、太字の主語がもともとは△の位置にあり、そこから繰り上がったと考えることができるので、繰り上げ構文と認められる。

それでは、こうした繰り上げ構文がどのような意味を表すかについて(5)の手順に沿って考察しよう。

車輪の hub, spoke, rim, wheel の意味の違いをどう説明すればよいだろうか?直感的に言って、同じもののどの部分を指しているかが違うように感じられることだろう。そこで、語は、ある事物を背景にしてその中の特定の部分を選び出して指し示すと考えてみよう。背景として語が喚起するもののことを「ベース」、その中で指し示される部分のことを「プロファイル」と呼ぶと、hub, spoke, rim, wheel は、ベースは同じだが、それぞれ異なる部分をプロファイルとして表すと言える。(以後、「プロファイルとして表す」こ

とを「プロファイルする」と言うことにする。) プロファイルを太線、ベースを細線で表すと、これらの語の意味の違いは次のように図示できる。

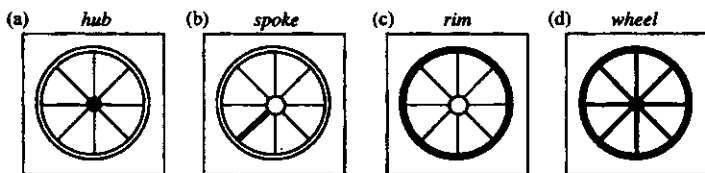


図1 Langacker (2008: 67)

こうした例から、語の意味を記述する上で、ベースとプロファイルという道具立てが必要だと結論づけられる。ここまでが (5i) の作業である。

さて、ベースからプロファイルを選択するということは、注意の焦点を向けるということにはかならない。「注意」は、非言語的な現象にも関与する認知能力であるので、ベースとプロファイルという道具立ては (5ii) を満たすと言えよう。

次に、下の例を下線部に注目してみよう。

- (7) a. The kettle is boiling.  
 b. I'm in the phone book.  
 c. Roger blinked.  
 d. Your dog bit my cat.

この中で、(a) と (b) はいかにも比喩的な表現と感じられるだろう。(a) においては沸騰しているのは、やかんではなく、その中に入っている水である。同様に、(b) において電話帳に載っているのは、私という人間ではなく、私の氏名・住所・電話番号である。これに対して、(c) と (d) は字義通りの表現のようにみえる。しかし、(c) においてまばたきという行為に最も直接的に関与しているのは、ロジャー全体ではなく、彼のまぶたであろう。さらに、(d) において「噛む」という行為に最も直接的に関与しているのは、犬全体ではなく、その歯や顎であり、噛まれることに最も直接的に関与しているのは、猫の一部 (例えば、尻尾) である。このように考えていくと、

(c) と (d) は、(a) と (b) と本質的に変わらないことがわかる。

ここで、ある行為に最も直接的に関与するもののことを「アクティブ・ゾーン」と呼ぶと、(7) の例ではいずれもプロフィールとアクティブ・ゾーンがずれている。例えば、(a) では boil の主語として「やかん」がプロフィールされているが、その中に入った<水>がアクティブ・ゾーンとして働く。このようなプロフィールとアクティブ・ゾーンのずれはごく普通の現象であり、必ずしも修辭的な表現ばかりに見られるものではない。逆にこのずれが見られないのは、The spacecraft is now approaching Uranus. (宇宙船が天王星に近づきつつある) のような特別な場合に限られる。

以上のことから、(7) の下線を引いたような語彙の意味を記述する上で、アクティブ・ゾーンという道具立てが必要であることとなる。これが (5i) の作業である。

それでは、アクティブ・ゾーンは、一般的な認知能力と関係づけることができるだろうか？これが (5ii) の作業である。

(7a) がメトニミー (第5章) の例としてしばしば挙げられることからわかるように、プロフィールとアクティブ・ゾーンのずれはメトニミーの一種である。(一種ということは、「寝る」で<眠る>を表すような場合(例：昨日はぐっすり寝ましたか？)のように、プロフィールとアクティブ・ゾーンのずれと無関係なメトニミーも存在するということである。)さらに言えば、メトニミーとは「参照点能力」という一般的認知能力の言語的反映である (Langacker 1999: Ch.6)。参照点能力とは、知覚やコンテキストの上で際立ったもの(参照点)にまず注意を向け、それとつながりをもつ別のもの(目標)に注意を移行させ、捉える能力のことを指す。(7a) を参照点能力の観点から分析すると、「やかん」という目に見える容器を参照点とし、その中にある目に見えない中身、すなわち、<水>を目標とするとと言える。言語表現が指し示すプロフィールは表現されることによって際立ち、参照点として機能し、言語表現が明示的には指し示さないアクティブ・ゾーンが目標となるわけである。この参照点能力は非言語的な現象にも関与する。例えば、漁師は海上に集まっている海鳥の群れを目印にして、その下には魚群があると判断する。つまり、目に見え、際立っている海鳥の集まりを参照点として、その下の海の中にいる魚群を目標として位置づけるわけである。よって、アク

ティブ・ゾーンという道具立ては (5ii) を満たすと結論づけられる。

さて、(5iii) として、以上みてきた道具立て——プロファイル、アクティブ・ゾーン——が文法現象の記述にも役立つかどうかを考える。ここでようやく「繰り上げ構文」の話となる。次のペアを比較してみよう。

- (8) a. I expect that Don will leave.  
b. I expect Don to leave.

(a) では、that Don will leave が expect の目的語としてプロファイルされている。これは expect と最も直接的に関与するものなので、この文ではプロファイルとアクティブ・ゾーンのずれは認められない。これに対して、(b) では Don が expect の目的語となっている。しかし、予期するのは人間ではなく、出来事なので、(b) において expect と最も直接的に関わっているのは、「ドンが去る」という出来事であると考えられる。すなわち、(b) では Don がプロファイルされているが、Don to leave という出来事がアクティブ・ゾーンとして働くとは分析される。文脈から明らかな場合は、次の例のようにアクティブ・ゾーンが明示されない場合もある。(これは、Your dog bit my cat on the tail with its sharp teeth. と Your dog bit my cat. の関係と平行である。)

- (9) Q: Who is coming to your party?  
A: I expect Tom and Sally.

まとめると、繰り上げ構文は、モノ（人・物を合わせてモノとする）をプロファイルして際立たせ、それが関与するコト（出来事、行為）をアクティブ・ゾーンとする「意味」を表すと言える。

この分析が正しいとすると、繰り上げ構文は、プロファイルとアクティブ・ゾーンという道具立てで記述できることになり、(5iii) が達成される。これにより、プロファイルとアクティブ・ゾーンという道具立ては、(i) 語彙レベルの意味記述に必要で、(ii) 認知能力の観点から独立に動機づけられ、(iii) 文法現象の記述に用いることができる、という (5) の条件を満たすことになる。

ところで、英語の繰り上げ構文とはプロファイルとアクティブ・ゾーンの

配置が逆転する構文が日本語にある。次の例をみてみよう。

(10) a. 主要部外在型関係節

[皿の上にある] りんご をくすねた。

b. 主要部内在型関係節

[りんご が皿の上にある] のをくすねた。

(a) は普通の関係節で、「皿の上にある」が「りんご」を修飾し、どんなりんごをくすねたのかについて制限を加えている。他方、(b) において私がくすねたのは、「りんごが皿の上にある」という出来事ではなく、あくまで「りんご」である。この点で (b) は (a) と同じような意味を表すと言えるが、「りんご」が (a) では従属節の外にあるのに対して、(b) では内にある点が異なる。これに着目し、(a) は「主要部外在型関係節」、(b) は「主要部内在型関係節」と呼ばれる。

さて、(b) の主要部内在型関係節において、「くすねる」は「りんごが皿の上にある」という節を目的語としてとり、プロファイルしている。しかし、「くすねる」という行為に最も直接的に関係するのは「りんごが皿の上にある」というコトではなく、「りんご」というモノである。よって、主要部内在型関係節の主節動詞(くすねる)は、コトをプロファイルするが、モノをアクティブ・ゾーンとしてとると言える(野村 2001)。これは、上でみた繰り上げ構文の場合と正反対になっている。コトを四角、コトに参与するモノを丸で表し、プロファイルを太線、アクティブ・ゾーンを点のパターンによる塗りつぶしで表して、2つの構文の違いを図示すると、次のようになる。

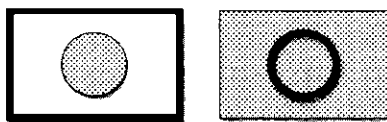


図2 日本語主要部内在型関係節(左)と英語繰り上げ構文(右)

このように両者は正反対のプロファイルとアクティブ・ゾーンの配置をしているが、それぞれに動機づけがある。一般に、コトとそれに参与するモノ

を比べると、コトが抽象的なものに対して、モノは具体的で際立ちが高いと言える。そのため、モノを参照点としてコトを目標とするのが普通である。例えば、Lincoln's assassination のように、暗殺という出来事を同定するのに暗殺された人を参照点として持ち出すのは普通なのに、暗殺された人を同定するのに暗殺事件を持ち出すのは普通でないので、\*the assassination's Lincoln とは言えない。よって、繰り上げ構文はこのような自然な把握の仕方を反映していると言える。

この観点からすると、コトを参照点としてモノを目標とする日本語の主要部内在型関係節は普通ではないのかもしれない。しかし、次のように考えてみることもできる。私たちは、コトをモノ抜きには把握できない。例えば、「走る人」抜きに「走る」ことを思い描くことはできない。このことは自明であろう。しかし、それと同時に、モノもコト抜きには完全には把握できないと言える。

- (11) 「だからわれわれは「こと抜き」で「物」を知覚することはできない。「こと」を見ないで「物」を見ることはできず、「こと」に触れないで「物」に触れることはできないのである。テーブルの上のナイフとフォークを見ることは同時にその布置、例えばナイフがフォークの右手にある「こと」を見ることである。ナイフを手にすることは同時にそれが冷く重く滑らかである「こと」に触れることである。」  
(大森 1976: 181)

主要部内在型関係節が示しているのは、こちらの方の事態把握の可能性である。このように文法現象の分析を通して、ヒトの把握の様式に迫ることもできるわけである。

### 3. 認知言語学の文法観の言語学史における位置づけ

上で、認知言語学の文法観として使用基盤モデルと記号的文法観の2つを取り上げて、概観した。これらの考え方は認知言語学の創見と言えるだろうか？本節では、認知言語学の文法観を言語学史の中に位置づけることによってこの問題を探ることにする。

認知言語学の文法観には、近代言語学の父とされるソシュールと共通す



る面が多い(野村 2007, 2018)。ソシュールの『一般言語学講義』(原著 1916 年)から次の引用をみてみよう。

- (12) ひとはここで異議を差し挟むかもしれない。文はすぐれて統合の典型である。ところが文は言(=パロール)にぞくし、言語(=ラング)にはぞくさない(中略);とすれば、統合は言のなわばりだということにはならないか? われわれはそうは思わない。(中略)

まず、言語にぞくする表現がはなはだ多数見出される;熟語がそれであって、反省してみればそこに意義ある部分を区別しえなくもないが、それにみじんの変化をも加えることを慣用が禁じているのである(中略)これらの言回しはその場で作れるものではなく、伝統によって供せられているのである。(中略)

しかしそれだけではない;規則形にもとづいて構成される統合は、そのすべての類型を、言ではなしに、言語に帰属せしめねばならない。じじつ、言語のうちには一として抽象的なものはないから、そうした類型は、言語がじゅうぶん多数の標本を登録しておいてはじめて、存在するのである。(ソシュール 1972: 174-175)

上の引用の冒頭にある「異議」を半世紀後に再び差し挟んだのが生成文法である。ラングが語の集まりであるなら、語を並べ句や文を作ることはラングではなく、パロールの問題ではないか? だとするとソシュールのラングの考えでは文法を扱うことができない。それゆえ、ソシュールのラングはチョムスキーの「言語能力」(competence)とは似て非なるものであるというわけである(Chomsky 1965: 4)。この異議に対するソシュールの反論は、上の引用に既に示されている。すなわち、ラングは語だけではなく、熟語などの慣用表現を「じゅうぶん多数の標本」として含むものであり、それらに基づく統合の「類型」(認知言語学でいう「スキーマ」に相当する)をも含んでいるとされる。「そうした類型は、言語がじゅうぶん多数の標本を登録しておいてはじめて、存在するのである」とは、使用頻度・定着度の高い具体的な言語表現からスキーマとしての文法が立ち上がるという「ボトム・アップ」の考え方を示しており、「使用基盤モデル」の考えと類似する。

認知言語学の「記号的文法観」という考えも、ソシュールにその先駆を認

めることができる。次の引用を見てみよう。

- (13) 文法学は言語を表現手段の体系として研究する；文法的とは、共時的かつ意義的というのに等しい (ソシュール 1972: 187)

文法が表現手段の体系であるならば、文法は意味を表わす存在であるというわけである。

使用基盤モデルと記号的文法観を思わせる考え方は、サピアにもみられる (Sapir (1970 [1933]: 5-6))。このように、認知言語学の文法観を構成する使用基盤モデルと記号的文法観という考え方自体は、言語学史上にその先駆を認めることができるものであり、決して独創的なものではない。認知言語学の独自性は、生成文法によって過去に葬り去られたかにみえたこれら2つの伝統的考えを再評価し、コインの両面として位置づけ、統合的な文法観を提示するとともに、文法を言語に特化されない認知能力の観点から動機づけようとした点にある。すなわち、記号の集まりとしての言語を習得する過程に認知能力が働いているとするとともに、(5)のようなプログラムのもと、記号の意味を認知能力に根ざすものとしたわけである。さらに、使用基盤モデルについて言えば、ソシュールにみられた「ボトム・アップ」的要素に、認知言語学は、コネクショニズム (平易な入門書として、守 (1996) を参照) の影響のもと「非還元的」と「最大主義」の要素を付け加えるとともに、言語習得・心理言語学的な証拠を提出し、使用基盤モデルを練り上げたと言える。記号的文法観についても、認知言語学は文法のさまざまな要素——文法形態素、文法関係、品詞、構文——までもが意味を表す記号であることを実証的に示した点が独自の貢献と言える。こうして認知言語学は、いわば古い部品に息を吹き込み新しい機械を作り上げたと評価されよう。

#### 4. おわりに

本章では、認知言語学の文法観として使用基盤モデルと記号的文法観を取り上げた。これらは、生得的な文法知識や統語論の自律性を仮定する生成文法の文法観 (第1章) とは大きく異なるものの、ソシュールをはじめとする言語学史上に先駆をもつこと、その一方で、使用基盤モデルと記号的文法観を統合し、具体的な言語現象によって肉付けし、一般認知能力と関連づけ

た点において認知言語学の文法観がこれまでの文法理論とは区別されることをみてきた。本章でみた認知言語学の文法観の成否は、生成文法などによって統語論独自の道具立てを用いて記述・説明されてきた文法現象に対して、そうした道具立てを用いずともどこまで説明することが可能かによって検証されることになる。

## 参考文献

- 大森荘蔵 (1976) 『物と心』 東京大学出版会.
- 鷹家秀史・林龍次郎 (2004) 『詳説レクシスプラネットボード』 旺文社.
- 野村益寛 (2001) 「参照点構文としての主要部内在型関係節」『認知言語学論考』 1, 229-255.
- 野村益寛 (2007) 「ソシュールから認知言語学へ—記号的文法の系譜」『言語』 36-5, 32-39.
- 野村益寛 (2018) 「認知文法からみたソシュール—「記号体系としての言語」の系譜」松澤和宏 (編) 『21世紀のソシュール』 水声社, 243-256.
- フェルディナン・ド・ソシュール (1972) 『一般言語学講義』 岩波書店.
- 守一雄 (1996) 『やさしいPDPモデルの話』 新曜社.
- Brinton, Laurel and Elizabeth C. Traugott (2005) *Lexicalization and Language Change*. Cambridge University Press.
- Bybee, Joan (2007) *Frequency of Use and the Organization of Language*. Oxford University Press.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Sapir, Edward (1970) *Culture, Language and Personality*. University of California Press.
- Taylor, John (2012) *Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford University Press. [西村義樹ほか (編訳) (2017) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか』 くろしお出版.]